



KNIT #2

JIA城北地域会からの地域紹介と活動報告

JIA 城北地域会からの地域紹介と活動報告ニッソ

KNIT #2

C O N T E N T S

OCTOBER 2012

●特集1 2050年の城北地域

○P1 ~7 城北地域会会員等によるコメント

秋山 信行、柴田 知彦、鈴木 和貴、久間 常生、深川 良治、山本 雅之、大川 宗治、
信原 利行、佐野 綾、武田 実代子

●特集2 寄稿 私のまち 過去・今日から明日をみる

○P8 ~11 城南住宅（練馬区）上野 泰

○P12~13 常盤台の景観を守る会（板橋区）島田 晴子

○P14~15 西ヶ原谷田川（北区）横溝 富也

●KNIT 城北4区リポート

○P16 城北4区リポート 地形図に見るKNIT

○P17 北区リポート 北区の地形 深川 良治

○P18 練馬区リポート Nerima景観まちづくり会議の活動 山本 雅之

○P19 板橋区リポート 緑が豊かな街へ／みどりのマップ創り 鈴木 和貴

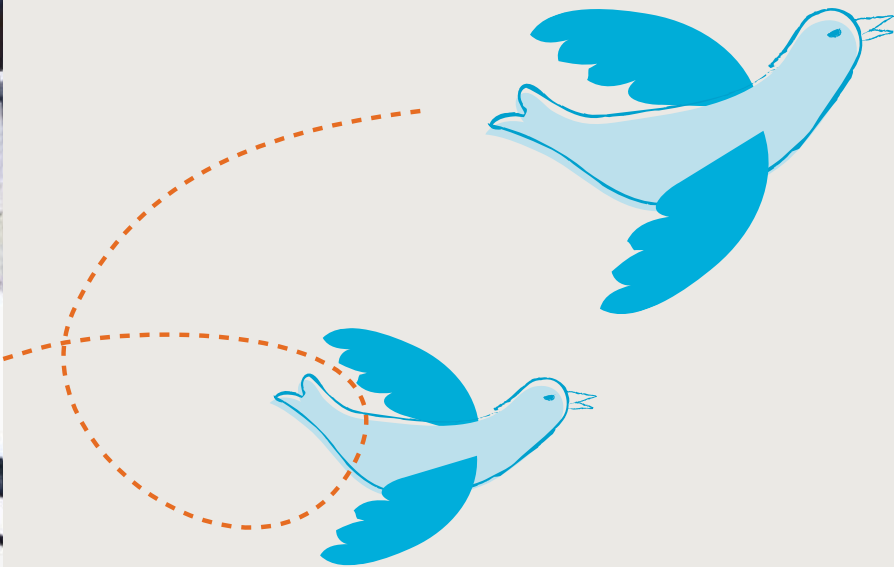
○P20 豊島区リポート 国道17号白山通り街路樹の移植 秋山 信行

●編集後記 柴田 知彦



特集 2050年の城北地域

50年前、現在、そして50年後
我々は確かに時代の中を生きている



特集 2050年の城北地域

リアリティある未来のあるべき姿を・・・

過去を振り返り、これまでの変化の実相から考えてみる

震災やエネルギー問題がきっかけで、国や社会全体の方向性に関し今後急激に価値観の変換が進むと思われます。また少子高齢化、人口の大幅な減少が予想される2050年の都市や建築を取り巻く状況は、現在とは大きく異なるでしょう。今後の地域のまちや建築を仲間と共に考え、将来のあるべき姿を考えています。その頃の私たちは、まちづくりの専門家「コミュニティアーキテクトとして地元により深く信頼され、みんなが頼れる環境、景観、空間づくりへ向けて活動していることでしょう。



秋山 信行
N.Akiyama
秋山設計事務所
豊島区巢鴨
巢鴨・西巣鴨地域
まちづくり協議会

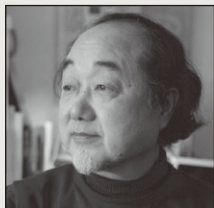


1960年頃 自宅前の空き地にて雪の日12歳(8歳年下の弟と)巢鴨郵便局の裏手の敷地。
1965年頃に電電公社に買い取られ巢鴨電話局となった。



同じ場所 2012年 (NTT 通用門) 巢鴨で最初のSRC造31mの高層ビル電電公社局舎が建設され増築スペースとして残された駐車場。その後民営化され今はNTT 東日本。

2050年頃の見通し
45年前情報産業の先端をゆく電話局として電話交換機を設置する局舎は建てられたが、現在では回線デジタル化で接続・交換機スペースは殆ど必要なく増築用空地は未だ駐車場のままである。
2050年頃には、情報インフラも光回線から次世代 infrastructure に代わっているであろうか。



柴田 知彦
T. Shibata
SKM 設計事務所
豊島区目白
テーマ：まちを創る建築



1950年頃 豊島区目白
戦後焼け野原は一面コスモス畑だった

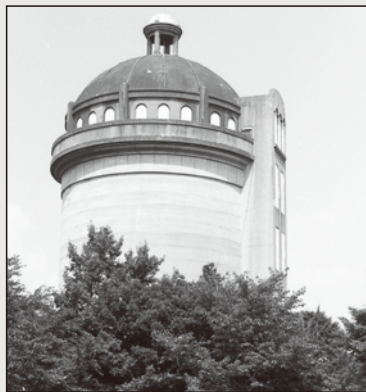


1本の植樹から緑深い住宅に育った
パストラルコートと周辺（目白）

この環境が更に育つのか
それとも消滅するか…
平和、災害、経済、相続、
受け継ぐ者達の資質次第か。



鈴木 和貴
K. Suzuki
PAX 建築計画事務所
板橋区向原在住
板橋区小茂根在勤
テーマ：まちを創る人は誰？

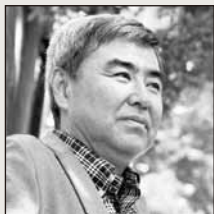


1937年完成の給水塔は本来の使命を
終えた後も地域にとって大切な存在



地域資産を壊し似て非なるものを創る
感性の記録が新たな地域の記念碑

地域にかかわる者が、
次代へ継承すべき
地域の歴史と文化に
敬意を表せない限り、
魅力ある「まち」には
ならないであろう。



久間 常生
T.Kyuma
久間建築設計事務所
練馬区石神井台
テーマ：
街づくりから住まいまで



1947年
右上が石神井公園三宝寺池
中央下から右にかけて
石神井川沿いは全て水田。
他は畑と屋敷林に囲まれて点在する農家。



現在
石神井川沿いの水田は全て消滅し、
戸建・集合住宅地になり畑地も
ほとんどが宅地化。
屋敷林、生産緑地が僅かに残っているだけ

都内で緑地率上位を誇る練馬区ですが
この半世紀、
宅地化・オープンスペース減少の
歴史でした。
2050年に向け、量をみたく都市化と、
質を高める環境・空間創造の
真の両立ができるかが問われます。
まだ間に合う環境都市創造を
まちづくりの目標に…



深川 良治
R.Fukagawa
深川良治建築計画研究室
北区西ヶ原
テーマ：太陽に住む



手川文夫氏撮影 北区景観百選ガイドブックより転載
1954年北区西ヶ原一里塚
街並が史的痕跡の上に展開されていた。



家は建て替わり、特に道路の南側は
高層化したことが影で分かる。

通過交通量を抑制することで
徒歩の高齢者の
日々の生活を支える
快適さが増し、
修景や改築による元気な
まちなみに育って欲しい。



山本 雅之
M.Yamamoto
東京建築士会練馬支部
景観部会所属
練馬区の景観まちづくり
活動



昭和33年の練馬区写真コンクール
出品作品だそうです。
場所は、石神井公園のボート乗り場
入口あたり、少年が遊ぶ様子は、
今も昔も変わりません。



山本がスケッチした現在の公園です。
公園自体は今も変わらない景観ですが、
背後に石神井公園駅前に建つ
超高層マンションの姿が見えます。

公園自体の姿は、
変わらないでしょう。
昭和5年に制定した
風致地区に負うところが
大きいと考えられます。
ただし、
背後には多くの高層建築の姿が
今後現れてくることが予想される。
水脈との関係も含め、
よくよく考える必要があります



大川 宗治
M.Ohkawa
一級建築士事務所 OM-1
豊島区高田
目白まちづくり倶楽部



1975年頃の都電荒川線誕生1年後の
面影橋付近。周囲に高いビルはなく
片田舎の無人駅のような風景。

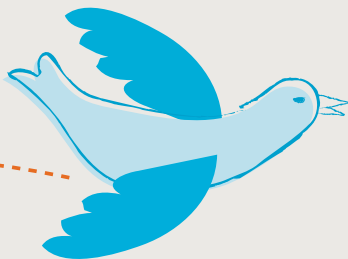


2012年現在の都電荒川線面影橋付近

周囲の環境は変われども、
道路中央に陣取った
プラットフォームや街路樹が、
昔の面影を遺し、
この街にアクセントを与えている。
50年後にも
この駅の名前の通りに、
面影を残してほしい。



信原 利行
T.Nobuhara
株式会社旬建築総合計画
豊島区東池袋
テーマ：人に優しい建物が街を創る

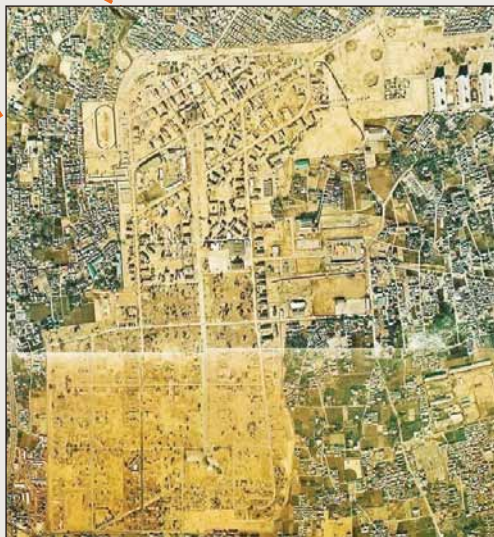


2050年の光が丘は、
建築家が地元地域の方々と
交流・ディスカッションを重ね、
みんなが誇りに思う
さらに素晴らしい街が
形成されていることでしょう。
中央部の緑が周辺に
発展していることを望みます。



旧日本陸軍撮影

1944年頃の成増飛行場



国土地理院航空写真

1972年に返還された頃の練馬区光ヶ丘。
戦後から1972年までグラントハイツと呼ばれた
米空軍家族宿舎が存在。
その前身は旧日本陸軍が建設した成増飛行場であった。



国土地理院航空写真

光が丘は返還後40年をかけ、
市内でも希少な緑の豊富な現在の街に発展しました。



佐野 綾
A.Sano
イラストレーター
渋谷区本町



1982年 首がようやく座り始めた
生後2ヶ月半の私と母。



徐々に首が座り始めた
生後2ヶ月の息子と私。

変化多様な今の世においても、
親から子へとつながれていく命は
変わる事のない人間の営み。
故きを温ねて新しきを知り、
更により良い私となり
この世となることを願う。



武田 実代子
M.Takeda
一級建築士事務所
環境建築研究室
微笑み空間工房



昭和22年の豊島園周辺では、
城南組合住宅や私の家の近くの
十一ヶ寺以外は、殆どが畑と屋敷林。



Photo 2012 Google Earth
平成24年は駅周辺や駅前通り沿い
に高層マンションさえある住宅地。

公立小中学校校庭以外の
オープンスペースは中央大所有から
都立となったグランド。
そして鎌倉街道沿い豊島城址、
豊島園遊園地の行く末は？
市民・公共の力で、次世代に
どのように残したいのか・・・
交通機関は？人口は？
昭和22年の姿もレイヤーとして
夢見て思い描く50年後。

過去・今日から明日を見る

城南住宅

練馬区

城南住宅組合 相談役
ウエノデザイン代表
上野 泰



常盤台の景観を守る会

常盤台の景観を守る会
常盤台まちづくり委員会
事務局

島田 晴子



板橋区



西ヶ原谷田川 北区

染井銀座・霜降銀座
生そば扇家
(有) キョートミ建築設計代表

横溝 富也



A 練馬区向山

B 板橋区常盤台

C 北区西ヶ原



1. はじめに

およそ現代社会において、「リアリティある」半世紀近い将来の姿を見通すことは、極めて困難なことであり、事実上不可能といつてよいだろう。したがって、ここでなし得る将来予測は、「理想像としての未来図」とどれほど違うのかは疑問である。たとえば「魔法」を肯定する「おとぎ話」と、「空想的」科学技術を駆使する「SF」との違いほどの差であろうか。ともあれ、全く仮定条件なしで予測することは不可能であるので、下記2. の諸項を、この考察の前提条件として仮定することとした。ただし中には“都合の良い”仮定も含まれており、いきおい「理想像」との違いの“あいまい”な、疑似リアリティにならざるを得ない。

2. 12箇条の前提条件

以下11の仮定条件と、1つの知見を予測の“前提条件”として考えてみたい。

★11の仮定条件

- 1) 2050までに東京には大震災は起こらないか、起きててもこの地域の被害は限定的
- 2) 我が国の“ミドル層”の復活、あるいは再形成(但し依然格差は大きいままだろう)
- 3) 高齢社会化の継続と社会のミックス化(多国籍化が進む)
- 4) 保守中道政権の持続(自由主義市場経済にとどまる、土地政策に大きな変化なし)
- 5) (人口減、世帯減にもかかわらず)大都市(特に東京圏)への人口流入の継続と、都市部市街地の高密度化の進行
- 6) 価値観の変化、特に土地所有意識の変化(所有価値から使用価値へ)
- 7) ライフスタイルの多様化、(都市)居住意識・形態の多様化
- 8) エコ意識の高まり
- 9) 地域活動の活性化と、住民による“タウンマネジメント”の普及
- 10) 「豊島園遊園地」の防災公園化
- 11) 「城南住宅組合」の存続



庭園通り 1930年頃



同 1979年



同 2011年



2050年

★1つの知見

- 1) 都市の遷移は一方向ではない。したがって成熟した都市は、時間の経過とともに様々な遷移形態を内包し、多様化する。空間的には“マダラ状”あるいは、“モザイク状”になる

3. 4つのシナリオ

「城南住宅」地区の将来の姿を、次の4つのシナリオで考えてみる。

- 1) 高密度化の圧力が非常に高いケース:「豊島園駅前」エリア並みの中高層高密度化の波に飲み込まれる。
- 2) 高密度化の圧力がやや低いケース:高層化には至らないものの、中低層集合住宅が主体となる。
- 3) さらに圧力が低いケース:引き続き低層戸建が主体となるものの、宅地の細分化が進み、人口増に対応すべく3階建てが普通となる。
- 4) 同上:居住者の入れ替わりは多いものの、多世帯居住化等によりさほど宅地細分化は進行せず、比較的ゆとりのあるまちなみが存続する。

これら4つのシナリオを、前記の12の前提条件により検証してみる。

- 1) 東京23区内(特に台地部)の開発圧力が引き続き高いものになると仮定すると、今後も鉄道沿線、幹線道路沿いは高密度化が進行するものと考えられる。したがって「豊島園駅」周辺の高密度化は進行するも

のと考えられるが、それが城南住宅地区まで拡大するという事は考えにくい。その理由として、城南住宅周囲の道路網は極めて脆弱であり、高密度の開発には耐えられないこと、(大震災でもないかぎり新たな大規模基盤投資も考えられない)第2に城南住宅地区内の宅地所有が“細分化”されており、大規模な再開発には適していないこと、また高コストであっても、城南住宅のような環境の良い戸建て住宅地に対する、一定の需要が存続すると考えられること、さらには、地区住民の抵抗が強いであろうこと、などがあげられる。したがって、シナリオ1)は可能性がきわめて低いものと考えられる。

- 2) シナリオ2)についても、ほぼ1)と同様の理由で可能性は低いと考えられる。“防災公園”を取り囲む集合住宅のまちという姿もイメージされ、すでに地区の周囲エリアでは低層集合住宅が散見されるが、前述の基盤の弱さにより、拡大するにせよ部分的なものにとどまることが予測される。また、組合員が経営する小規模な低層集合住宅(現行「組合契約」で認められている)が増大することも考えられるが、それが地区全体に大きな影響を及ぼすものとなることは考えにくい。

- 3) 地区に関わる開発圧力は、外部からのものに加え、相続あるいは多世帯居住化によって、今後も持続するものと推測される。その場合、宅地規模の細分化を許容するか、“3階化”(現在の法定高さ制限は

10Mであるが、「組合契約」により2階以下としている)を許容するか
の選択を迫られることも予想される。1980年代にも、(緑化余地を残
すために)細分化を避け、3階建を許容すべきとする議論がされた
ことがあった。これからも城南に住み続けたいと希望する居住者が
多いとすれば、やがて現行の宅地規模を維持しつつ、3階建を許
容する時が来るのではないかと考えられる。またその場合、上
階を賃貸するケースも多く出てくるのではないかと予想される。た
だし、3階建を許容するのは、敷地に“ゆとり”を持たせるためであ
って、いわゆる「都市型戸建」のような形には、ならないものと思われ
る。

- 4) 以上の考察により、最も可能性が高いと思われるのが、シナリオ4)
である。とはいえ、その場合でもある程度、宅地規模縮小(2011・3
現在の平均宅地面積は88坪強であった)の方向に向かうことは、ほ
ぼ確実といえよう。また、“戸建て住宅”を主体とするといっても、現
行の2階以下という形を維持することは、おそらく困難であって、上
記低層集合住宅、3階建等の多様な居住形態が、混在したまちと
なることが予想される。とはいえ、(相対的に)みどり豊かな、ゆとりあ
る低層住宅地として存続してゆくことは、ほぼ間違いのないところと
予想される。

すでに触れたように、成熟した都市は時間の中で獲得した様々な
“まち”のDNAを蓄積しながら多様化していく。東京がより成熟した
住みよいまちとなるためには、様々な居住形態を内包し、提供でき
ることが不可欠である。したがって、城南住宅のようなかつての「郊
外住宅」のDNAを受け継ぐ住宅地が、東京の中に“選択肢”の一
つとして存続していくことの意味は、決して小さくはないものと考え
られる。

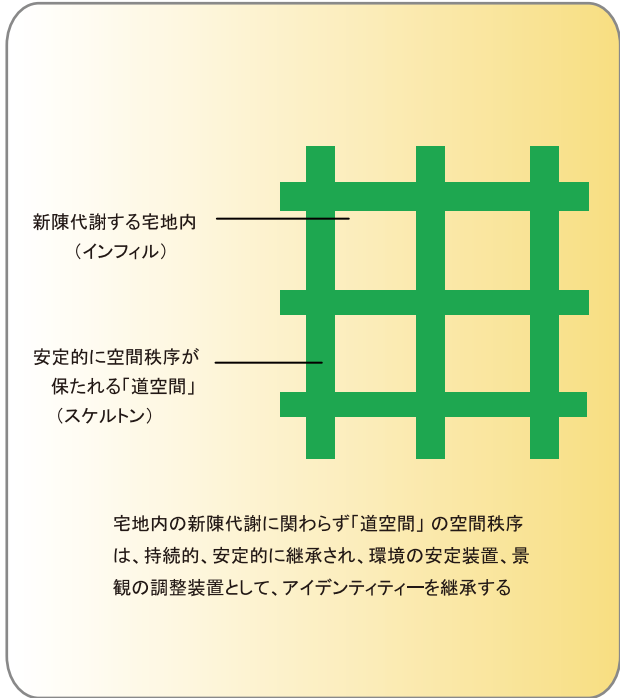


4. まとめ

「城南住宅」のコンセプトを振り返ってみると、創設期(1924)の「理
想的田園生活の場」から、「田園緑地的風致の維持」(1976「組合契
約」)、さらに「みどり豊かな道空間の形成」(2006「環境維持基本方
針」/2009「指針」)へと(宅地規模の縮小に合わせて)変化してきては
いるが、「みどりが命」(2009「リーフレット」)であることは、一貫して
いる。自ら「ガラパゴス」をもって任ずる人々(組合)が存続する限り、“近
自然型都市居住”への接近というベクトルは、これからもそう変わらな
いだろう。まちの基本は人である。しかし現代社会において人の出入
り、流動性は避け得ない。それを踏まえて、「新陳代謝と地区アイデ
ンティティーの継承」という、永遠の課題に依然取り組み続けているだ
ろう。現時点におけるその答えが、「道空間」の社会化ということであ
る。今後ますます宅地規模がタイトなものになっていくとすれば、“み
んなの場”(および残された緑化余地)としての、「道空間」の重要性
は増すものと考えられ、「みんなの庭」として道空間の“環境性能”が
ますます重視されていくものと予想される。そして、このような空間は
宅地内の利用形態(インフィル)の変化を超えて持続する、一種の
“環境インフラ(スケルトン)”として意識され、マネジメントのあり方も
含めて“社会化”され、地域に開かれることも考えられる。「城南住宅」
は将来、低層集合住宅や3階建、貸家等が増えてより多様化して
いったとしても、「郊外住宅」のDNAを引き継ぐ、“環境インフラを持
つ”まちなみの先駆例として、今後も存在感を持つ“むら”となり、大都
市東京の“個性ある片隅”として、存続していくことを予測(期待)して
いる。また、コミュニティとしては、多世代居住、グループ居住、賃
貸住宅の増加、ミックス(多国籍)等を踏まえながら、環境のみならず
防災、防犯、高齢者支援等々の、現代の地域社会が抱える多くの課
題に対する、「城南」なりの解を求めつつ、地域の“プライマリー集団”
としての(理想的)在り方を模索し続けているだろう。



城南住宅の道空間



環境インフラとしての「道空間」

*城南住宅組合は、1924年に共同借地を目的として設立された団体で、区域面積約5ha、組合員数170名(2011・3現在)、2011年に(財)住宅生産振興財団主催の第7回「住まいのまちなみコンクール」において「国土交通大臣賞」を受賞している。



常盤台の景観を守る会 板橋区 島田 晴子

常盤台はどう変貌していくのか

板橋区の中で、常盤台はかなり特殊な住宅地として知られている。最近また、このような昭和初期の庭のある住宅地の価値が見直されているようだ。昭和10年代分譲当時からのお屋敷町の雰囲気はまだ残されているし、都市計画に基づいたまちの構成はほとんどそのままではある。しかし、現在はかなり内部も外観も変容してしまっていて、それが良い方向に変化したとは誰も言い切れないだろう。

高層マンションが二つも建ち、チェーン店に明け渡されてしまった駅前の商店街を除けば、この街の特徴である曲線を中心とした街路や、クルドサック・ロードベイ・プロムナードなど、内務省の若き技官小宮賢一の引いた青写真はほとんど変わっていない。

下に示す写真は、左が1974年・1976年に都市計画研究者として常盤台を調査に訪れた金井一郎さんが撮った写真、右が2011年に同じアングルで撮った写真である。両者の間には35年の歳月が流れているが、一見街の姿はほとんど変わっていない、と誰もが思うことだろう。しかし、住み続けている住民の目から見れば、激変と言えるような変化が起きているのだ。いくつかの場所でのその変貌を見てみよう。

A



Aは常盤台の特徴であるクルドサックのひとつで、中の緑は増えているものの、周囲の家の生垣などが消滅している。このクルドサックは近所の山田さんと言う方が、一人できれいに手入れをしてくれていたが、87歳で亡くなった後は、娘さん夫婦があとを引き継いでくれている。しかし最近ゴミ置き場になっているのが懸念される。右側の白い塀の家は、照明デザイナー石井幹子さんが少女時代を過ごした家で、石井さんは常盤台を故郷と思って下さっているそうだが…

B



Bの写真では前方には巨大な高層マンションの姿が空を切つて聳え立つようになった。

C



Cの写真では、道の右側にあった保存樹木のケヤキがつい最近切り倒されてしまった。左角の家は所有者が替わり、大谷石の塀がなくなり、道路ぎりぎりまでの黒い建物に建て替わった。中庭を設けるとこういうデザインになる。しゃれ街協議会^(注)の要請で、若干の植え込みが角になされているが、敷地面積の割りに緑が十分とは言えない。街路樹も無くなっている。

D



Dの写真で道路右側のような趣の家は今では十指に満たない。代替わりが起き、相続税を払わねばなくなると、古い家や外構・樹木はさっさと更地にされて、業者の手によって細分化されていく。築70年以上の家々なので、文化財として行政のある程度の保護対策が必要なのだが、区側にその気があるのか否かは疑問。住んでいる人も住みづらい日本家屋より、生活の楽な方に魅力はあるし、相続税の問題も深刻である。

世田谷区で問題になっているようだが、常盤台でも所謂旗ざお地が増えている。いったん旗ざお状に分割された土地を更に二重に旗ざおにする例さえ現れている。通路部分に敷地をとられた分、家の建つ部分は隣家との間を1m取ることさえしない。その結果、新築の家の太陽光パネルの屋根から雪が氷の塊となって隣家に滑り落ち、トラブルとなる例まで出ている。十分に隣家との距離を取らない、取れないところから生じる環

境悪化の例である。もちろん一本の樹木も植える余裕などないのである。

常々思うのだが、外国の美しい統一感のある町並みに比べて、日本の都市景観がひどい原因は、何の基準も標準的モデルもないところにあるのではないか。実際家を建てる場合、ハウスメーカーに頼るとなれば、その街に見合ったもの、とか、相応しいものとかで薦められることはない。個々ばらばらに、自分の家のことだけを考え、素材も外観も自由に建てている。せっかく美しい景観を形作ったとしても、それが惜しげもなく破壊される一方で、未来を形作るものの基準ができていないのである。常盤台でも、せめて推薦とか標準モデルを提示することはできないだろうか。古き良きものは残し、新しく建てるものは奇をてらうのではなく、永年の美意識に耐えるものを望みたい。

2050年、この街がどう変貌しているかは、行政の姿勢と、住民の熱意の継続次第ではないだろうか。板橋区もやっと景観行政団体になり、常盤台については景観形成重点地区指定を経て、景観地区指定を目指すのかもしれない。しかし、その実現に何十年かかるのだろうか。そうこうしているうちに常盤台自体が景観的価値を失ってしまうのではないだろうか。住民である私たちも1代目は殆ど世を去り、2代目、3代目が思い出を基に頑張っているが、次の世代では愛着心が薄れていくのが心配である。当面、私たち「常盤台の景観を守る会」、「常盤台まちづくり委員会」は様々な働きかけをして、次世代に街を愛する心を育んでもらい、バトンタッチをしていきたいと思っている。



(注) 東京都のしゃれた街並み作り推進条例に基づき、2007年に発足したNPO法人。常盤台1・2丁目のすべての建築行為について協議を行っている。

西ヶ原谷田川

北区

横溝 富也

染井銀座・霜降銀座

石神井川が北区に入り、西ヶ原地域にくると谷田川(ヤタガリ)という名称になる。この地に生まれ育った私としては、どこが谷田川だったのか調べてみることにした。

巢鴨の青果市場より染井墓地の下を流れて、豊島区(上駒込村)の境域を形成して、霜降橋・谷田橋より荒川区西日暮里へ入り、谷中(台東区)と千駄木(文京区)の間を流れて不忍池へと入った。全長は不詳であるが行程よりみて一里あまりは充分にある。

谷戸川の名が示すように最初の流域である西ヶ原村には、東谷戸・西谷戸・南谷戸・谷戸の小名があり、水田が多く見られた。谷戸・ヤトは地域的には谷間で水田が出来る地とされている。谷田・谷津谷地もまた同系統の言葉とされている。中里村を経て田畑村に入ると小名に東谷田・西谷田があり、川の名も谷田川と改まり、今も谷田橋通りに谷田の名を残している。霜降橋とは風流な名前でも明治以降の命名とされ、市電・都電の停留所で知られたが、今はバス停に使われている。江戸時代には立会橋・境橋と呼ばれ、立会い橋の名は将軍日光社参拝の時に万が一があってはならないので、上駒込、西ヶ原村立会の下に点検修理を行なったがその必要も無くなれば境界を示す境橋という平凡な名に変わる。

谷田川沿いの道は江戸時代には上野から入る六阿弥陀道として春秋の彼岸には大層な賑わいをみせた。大正に入ると暗渠化が進み、地区も昭和7年より工事開始となり、暗渠化の上は道路となって、両側には田端銀座・霜降銀座・染井銀座等の商店街が形成された。

(北区郷土館シリーズ「北区の水ものがたりより」抜粋)



地図1 名探偵★浅見光彦の住む街
(ミステリーウォーク)の資料より
(江戸時代後期の地図の復元)



地図2 YAHOO地図 地図1より
谷田川位置 〓を復元

商店街の生い立ちと今後

右の写真3・4は霜降銀座商店街の中程の風景ですが、写真3の下のほうに小さい橋が写っていてそのなごりがうかがえます。昔聞いた記憶と、昔を知る人のご意見を聞いて回りましたが、当時、商店は谷田川のわだちの両側に点々とでき始めたそうです。昭和7年の暗渠化で賑わいを増したそうです。今はタイル張りのきれいな舗装がされていますが、当時は、土の混じった砂利道でした。

この地は駒込駅から6分程度と立地がいい割には、大型店舗の出店が無く、今でも昔ながらの商店街を形成しています。八百屋さんや魚屋さんの呼び声、揚げ物屋さんや焼き物屋さんのおいしそうな香りが漂っています。

近年、各店舗さんの跡継ぎが少なくなって将来を危惧しているというお話を伺いました。商店街の活力を維持しつつ、もし空き店舗になっても、すぐにまた新しいお店ができるように、商店街に面した所は、そのまま貸し店舗にして、商店を誘致しようとしているそうです。建築的にみて、魅力ある商店街創りに一役できればと感じました。

(霜降銀座商店街・企画宣伝部長様よりインタビュー)



写真3 霜降銀座栄会様 昔の写真より
(魚屋さん 昭和3年)



写真4 霜降銀座商店街を望む

KNIT

城北4区リポート

北区 練馬区 板橋区 豊島区



東京都区部地形図に見るKNIT・北-練馬-板橋-豊島の各区
「1954年の地図(講談社)」

北区の地形



図1.カシミール3D上の国土地理院地図情報(一部)

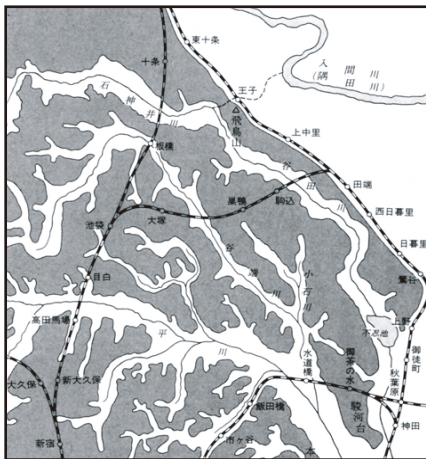


図2.源平盛衰記成立前の13世紀ころの地形図
 (「江戸はこうして造られた」鈴木理生 ちくま学芸文庫より)
 現在のJR線を重ね合わせてある。灰色の部分は台地上の地形
 であることを示す。

北区を地形に刻まれた標高のわずかな違いから眺めてみたい。図1.はダン杉本氏が作成した多機能地図ソフト「カシミール3D」に国土交通省国土地理院の地図情報を取り込んだものの一部である。よく見る首都圏地図とは異なり、交通網の広がりに加えて、わずかな高低差が濃淡で表示されている。図2.は川によって侵食された台地状の武蔵野丘陵地を灰色で示した、13世紀頃の推定復元図である。それぞれ比較しやすいようにモノクロの図2.の範囲に合わせたので、北区の上側が図には入っていない。図1.や図2.でまず目を引くのは中央上から右下へ京浜東北線・東北線が走っているあたりで標高を示す色が突然変わっていることである。隅田川沿岸から上野駅東側あたりはほとんど凹凸なく水平で4mから3mの高さの平野だが、モノクロの図で示されているグレー部分は標高25m前後の台地である。田端から上中里、王子、東十条それに赤羽までの京浜東北線・東北線の標高は約7mなので、概ね15m以上の崖下に線路があることになる。注目していただきたいのは、図1.では京浜東北線・東北線沿いの台地の内側で不忍池から飛鳥山西側まで黄緑色の帯状凹地が続いていることである。図2.では川に沿った白色の谷地に表現されている。その両側はやはり標高25mの台地だが、不忍池近くで6m、根津千駄木で7m、田端で11m、霜降橋で15m、西ヶ原3丁目目尻から飛鳥山下で17mの高さとなり、音無川、石神井川につづく。「江戸はこうして造られた」の著者鈴木理生氏の説によれば、13世紀頃に石神井川の流れを飛鳥山下の台地を掘り割って王子に抜き、隅田川に付け替えたらしい。モノクロの図2.の巣鴨駅の

上、飛鳥山の下の白い3本指状の扇状地(現染井霊園北西側)を源とする谷田川は実は石神井川の下流だったのである。別名「滝野川」と呼ばれ地名に残っているのは、同じように人為的に流れを変えたことによって侵食の力が増し、周囲の地形を溪谷まで変えた「等々力溪谷」や「御茶ノ水溪谷」のように、図3.の明治初期の彩色写真に見られるような滝のように流れる川だったらしい。(深川 良治)



図3.明治初期の滝野川の様子
 「長崎大学附属図書館所蔵」



#1

#2



Nerima景観まちづくり会議の活動

標題のグループは、平成19年末、東京建築士会練馬支部の景観部会メンバーが中心となり、支部建築士以外の人も自由に参加でき、練馬区の景観向上の活動を行うことを設立趣旨にしたグループである。設立のきっかけは、練馬区が景観法に基づく景観計画を策定するに際し、練馬区まちづくり条例のテーマ型まちづくり提案制度を活用して、区民グループとしての提案を行うことにあった。

提案は、多くの人々が共有してほしい練馬の景観の視覚的なイメージと、それを実現するための仕組みづくりという2つの柱からなっている。前者は、水彩スケッチを媒体として使ったが、景観計画の視覚的表現の重要性を説いている面もある。後者は、11項目の法的制度の提案を行った。(区の見解も含めた内容の詳細は、練馬区のホームページの景観まちづくりのサイトを参照されたい。)提案後、区の景観計画策定検討委員会にも参加し、平成23年5月に施行の運びとなった。

提案の背景に、提案をテコに、景観まちづくりを行政と一緒に展開することがある。現在、まちづくりセンターが主体になって始動した景観まちづくりに参加して活動を行っている。本年は、UIA世界大会でもコミュニティアーキテクトというテーマがあげられたが、特に3月に起こった東日本大震災が投げかけた建築士や建築家の社会的役割という課題は、強烈であった。改めて、社会という大きな視点から、私たちの日々の活動を俯瞰してみる謙虚さが必要だろう。

(Nerima景観まちづくり代表: 山本雅之)

Note: 添付のスケッチ#1は、提案書の中の1ページ分で、練馬区の基盤となる景観のイメージです。スケッチ#2は、生活街路の景観イメージの1コマで、人と街とのちょっとしたコミュニケーションは、まち歩きを楽しみしてくれるという趣旨です。スケッチ#4は、建物の隙間から見える都市景観の重要性が趣旨のイメージです。(喧騒の商店街、ふと横を向くとみどりの世界)

#3



#4



緑が豊かな街へ／みどりのマップ創り

■2006年から4年をかけて区内全域を廻り樹林地などの現況を「特定樹林地の自主調査レポート」としてまとめ、「樹林地等自然保存に関しての申し入れ書」として区へ提出しました。その活動に参加して感じていましたが、街の様々な緑は、多くの場合、個人の意志と努力によって守り育てられています。緑豊かな街を理想としながら、それを支える部分の大切さに気付かされたのがこの自主調査であり、支える部分の広がりを創れると思うのが「みどりのマップ創り」です。

■2010年5月、区内の一つの町丁を選び街中にある緑を調べてみる活動が始まりました。毎月第一土曜日の朝、最寄り駅に集まり白地図を手に街へ出ます。街を歩き、街を観察していく中で、今まで気付かなかった街の歴史や地理的な特色までもが街中の緑を通して見えてきました。また、それらの緑の将来にも思いをはせるようになりました。

緑は地域の共有財産とは、今では多くの方が認識しています。よって、緑豊かな街は豊かな地域資産を有している街と解し、地域の方たちが地域の緑に積極的に関わり、維持保全に参加することで、緑が豊かな環境を次世代に引き継ぐことができると信じています。

そして「みどりのマップ創り」がその行動へのモチベーションになると考えています。

■各自が緑への想いを白地図に描き、そして語り合っていく、これが「みどりのマップ創り」の基本作業です。気になる緑とともに自分自身で感じたことや何ができるか考えたことの描き込まれたマップは、参加された方の数だけで上がります。そのマップを地域の方たちが共有できれば素晴らしいことです。それは、地域に関わる人たちが地域の緑に対しての価値観の共有ができなければ、地域の緑は地域では守れないと考えるからです。

市民が市民へ語りかけること、そして市民自身で地域について気付き考えること。その意義は大きいと思うし、「みどりのマップ創り」がその触媒になりうると考えています。 (鈴木 和貴)



この活動は、オール東京62市区町村が共同で取り組む「みどり東京・温暖化防止プロジェクト」の一環である「TOKYO EARTH WORKERS collection 2012～みんなで環境を考える共同行動～」にて優秀賞を受賞しました。



国道17号白山通り街路樹の移植



歩道 街路樹 自転車道 車道



既存(プラタナス) 街路樹

私は平成16年に豊島区から巣鴨・西巣鴨地域まちづくり協議会委員の公募があり応募して、協議会や分科会に参加しております。以来、月一回程の分科会(白山通りの拡幅を考える会)に参加し数えて9年目となります。小学校の家庭科教室に夜7時半から9時まで10名ほどの委員が集まります。平成10年の協議会発足以来町会の委員でおられる座長さん等と、共に活動を続けております。

地下鉄西巣鴨駅からJR巣鴨駅までの道路幅40mに拡幅する区間を500mごとに3分割し工事区間分け、東京都第四建設事務所が国道工事を発注。私が参加しているのは、その第2期工事区間の拡幅を考える会です。歩道幅を6.5mにするに際し自転車と歩行者の分離を試みるのが提案されました。その分離する植栽帯の主たる樹木は都電の走っていた時代から木陰を提供してきたプラタナスです。街路樹は第二次大戦敗戦後植えられ現在では目通り直径30cmに成長し高さ7mほどの大きな木となっているのです。拡幅前は60数本の既存樹が有るのですが拡幅後には車庫経路としての歩道の切り下げ個所が増えたり、樹木を拒む住民があったりと、移植樹30数本しか植えることが出来ません。

10年前に完成した第1期拡幅は、西巣鴨から新庚申塚までの区間・歩道。残念ながら街路樹は高さ3mの細く若いハナミズキが植えられ、さっぱりとした歩道空間です。歩行者と自転車が混交し危険な思いがします。

拡幅を考える会より地元の要望を第四建設事務所に伝え続け、第2期工事は3年間の予定で始まりましたが、いくつか障害が生じて滞り4年たっても、まだ8割がたの完成状況です。大昔40年も前この17号線の巣鴨地区国道拡幅の地元説明会に参加しました。やっと4年前に実施に移され、もうすぐ完成されるのです。工事の簡便さだけで、親しんできた既存街路樹を切り倒し捨てることなく、自分達と同じ年輪刻んだ樹を移植し、時の流れをも継続させて、将来へ繋いでゆくまちづくりを目指すわけです。第3期のとげぬき地蔵尊・高岩寺周辺区間へも、繋がって欲しいものです。(秋山 信行)



7年前に作成したコンセプトポスター
まちづくり町会の掲示板に貼る

編集後記

リアリティある将来のあるべき姿を・・・過去を振り返り、これまでの変化の実相から考える・・・

これが今回の特集の主題です。将来像を示すには、未来学的に発想する方法、現在の指標からトレンド予測する方法など、いろいろと考えられますが、ここでは、過去を遡り、今日との比較から変化の実相をとらえ、その事実を踏まえて将来像のあるべき、あるいは、そうならないのでは、と思われる姿を俯瞰します。過去と今日をそれぞれ一枚の写真で示し、将来・一応2050年頃は・・・を簡単な記述で示しました。定点写真のようにも見えますが、あくまでも過去から今日の変化の実相を示すことが目的です。

戦後の建築家達がモノのない時代、復興・成長への意欲に燃えたあの時代、良く描かれた未来図のような将来予測ではなく、個人の発想と表現により時代を見通す（とする）作品主義でもなく、あくまでも事実を基本とし、取り上げた個人の価値判断をそこに加え、将来を見通す方法としました。社会的な地域的な変化、個人の仕事によるその場に生まれた小さな変化、そうしたリアリティを大切にしたいと思ったからです。こうした検証をとおして、城北地域会は地域を見通す目を養い、地域づくり、まちづくりに加わります。皆さまも試みられては如何でしょうか。

(柴田 知彦)



KNIT #2

発行：J I A城北地域会
(社)日本建築家協会 (J I A) 関東甲信越支部

発行日：2012年10月20日

編集：吉田 孝、大川 宗治、信原 利行

イラスト：吉田 孝、佐野 綾

表紙デザイン：鈴木 和貴

問い合わせ・ホームページ：

<http://www.jia-kanto.org/johoku/index.html>



KNIT（ニット）とは北区（Kita）練馬区（Nerima）板橋区（Itabashi）豊島区（Toshima）の城北4区の頭文字で「編む・結ぶ」との意味から、地域の人・歴史・文化が織りなす美しいまちを目指した城北地域会の活動を表しています

©Photo K.Suzuki / Abitazioni nel Quartiere Gallaratese / A.Rossi 1969